幸せを求めた少年の目録

らーゆ★

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界に絶望した少年の第二の人生の物語。

勢いで書いてしまった。

間違いなどあったら指摘お願いします！

目次

序章　絶望の終わり ―― 1
オリキャラの設定・その1 ―― 6
その1　目覚めと出会い？ ―― 10
その2　波乱の予兆 ―― 19
その3　戦場へ ―― 27
その4　参上？ ―― 40
その5　魔物退治開始、速攻終了 ―― 51

序章　絶望の終わり

―死にたくない。

――助けてくれ。

とある少年、神野（かみの）レンは恐怖の余り全く出てくれない声とは裏腹に頭の中でそう叫び続けていた。

彼は逃げていた。

この世に絶望と恐怖をもたらした存在、『アラガミ』から。

レンはＧＯＤＥＡＴＥＲ。

この荒ぶる神々から世界を救うためにヤツらの無敵の力を取り込み、ヤツらと戦うために造られた兵士。

レンは誰よりも努力した。

時には笑われ、蔑まれても決して諦めずに明日の幸せのために戦い続けた。

レンは故に強かった。

ゴットイーターの中でもかなりの実力を誇り、何より誰よりも正義感が強い、最強の戦士だった。

そして強くなったレンには仲間ができた。みんなレンを頼りにしていた。レンもそれが嬉しかった。

今日もいつもの仲間とミッションにきていた。皆レンがいれば安心だと思っていた。レンもそう思ってしまっていた。

しかし、その油断は突然レンに絶望を突きつけた。

背後から近づくヤツの存在に気づかなかった。

ヤツの名は『ハンニバル』。

何もかもを跡形も無く燃やし尽くす豪炎を自由自在に操る不死身の存在。

ハンニバルの姿を見た瞬間、レン以外は武器を捨てて逃げ出した。

そしてレンは聞いていた。

『なんでレンも気づいてねぇんだ!!マジ使えねぇ!』

そのまま立ちすくむレンを他所にレンの仲間は皆逃げ出しバラバラになってしまった。

そんな中、その中の1人がハンニバルに狙われた。

その人はレンにとって大事な存在。婚約者。

彼女はまだゴットイーターとしての経験は浅く、今回のミッションも実地訓練をかねたものだった。

そんな彼女にハンニバルなんて相手に出来るわけがない。
その彼女が目の前で殺されようとしていた。
レンは思わず斬りかかったが、まるでハンニバルは分かっていたかのようにレンに反応し、豪炎を纏った腕に押し潰されたレンは一撃で満身創痍となってしまった。
ハンニバルがレンに気が向いてるスキに彼女はレンを見捨てて逃げ出す。
そんな彼女を見ていたレンは思った。
捨てられたのだと。
所詮俺はそれだけの存在だったのだと。
まるで道具のように持ち運び、いいようにおだてて敵と戦わせるための道具なのだと。
レンは心底絶望した。
しかしそんな絶望に浸っていても、体は死にたがらない。
レンは満身創痍の状態で逃げたしたのだった。

―畜生。なんでこんな事に。
―見捨てられるくらいなら、助けるんじゃなかった。
―もう誰も信じれない。2度とあんな思いはしたくない。

―なんで俺がこんな目に。
―くそ。いま幸せな奴が憎い。すべての生きてる人間が憎い。
―こんな世界から逃げ出したい。
―そうだ。死ねばいいじゃん。もうこんなクソッタレな世界なんて出ていけばいいんだよ。
そう思ったレンは必死に逃げていたその足を止めた。
すぐ後ろからハンニバルが追いつき、目の前に佇む。
「…ああ。俺もお前みたいに自由になりたい」
そう呟き、レンは死を覚悟した。

しかし、ハンニバルは動かない。
レンをじっと見つめその場で佇む。
「……？どうした？」
レンがそう呟いた直後だった。
「…っ!?」
レンとハンニバルの間に真っ黒な穴が出現した。
勿論何の支えもない1人と1匹は、そのまま穴の中へと消えていったのだった。

レン達が落ちた後、穴はまるで意思があるかのように閉じていった。
そしてその場に残ったのはレンがずっと愛用してきた神機のみだった。

オリキャラの設定・その１

名前…神野レン
性別…男
年齢…１７歳
コードネーム…ｒｅｎ
使用神機…ショート、ブラスト、シールド
概要…髪型は実験と訓練付の日々で伸びきっており、傍から見ればその女の子っぽい容姿と白い肌からしばしば女子と間違えられることも。
幼い頃に住んでいた家をアラガミの群れに襲われ、ゴットイーターだった父は1人で果敢に群れと対抗したものの死亡。母も父の死の悲しさに耐えきれず自殺。レンは満３歳にして独り身となる。
その後レンはさまよっている所をフェンリル研究員に拾われ保護してもらう。
しかし保護とは形だけ。実際には独り身をいい事に毎日ぎりぎり死なない程度までの薬品やオラクル細胞の投与などを行い新型神機使いの実験道具とされていた。
その無茶苦茶な実験の甲斐もあって、満１０歳にして世界初の新型神機使い候補者と

なり、見事神機使いとなる。
しかし元から戦闘経験など皆無、むしろ毎日のように実験に明け暮れた日々を送っていたレンは体が弱く、とても戦っても勝てる様子ではなかった。そこからレンは徐々に周りの人間からゴミ扱いされるようになる。
しかしレンはその悔しさをバネに人の何倍もの努力をして、満１５歳の頃には世界最強とまでうたわれるほどになった。
それから2年の間も最強の名に相応しい伝説を残す人物となるが、突然の事故死と公式で発表され、彼の伝説は残った神機と共に永遠と日の元に出ることは無かった。（公式発表）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ハンニバル
…極東支部にて初めて確認された大型アラガミ。竜と人を掛け合わせたような体躯を持ち、素早くしなやかな体術に加え、炎を武器状に変形させて操るなど、人間を思わせる動きが特徴。
背中の突起物に膨大な熱エネルギーを蓄えておりこれを破壊すると強烈な炎熱攻撃

を繰り出してくる。
攻撃属性…火
弱点属性…氷、雷
（ゴットイーターゲーム内のターミナルのデータベースから抜粋）

マルドゥーク
…白い体毛と赤い触手が特徴的なガルム神属感応種。感応能力により戦場のアラガミを呼び集め、さらに活性化時は他のアラガミも活性化させる。
ガルム同様、熱を操る能力を持つが攻撃範囲は大きく強化されており、単純な戦闘能力だけでも充分な脅威。
攻撃属性…火
弱点属性…氷
（ゴットイーターゲーム内のターミナルのデータベースから抜粋）

ガルム
…赤い体毛と岩のような装甲を纏った狼型のアラガミ。
両腕の巨大なガントレットの中には発熱器官が備わっており、これを駆使して獲物に

襲いかかる。

巨体でありながら狼ならではの高い俊敏性は失われておらず、高速の突進とガントレットの熱攻撃を組み合わせた攻撃は非常に強力。

攻撃属性…火

弱点属性…氷

（ゴットイーターゲーム内のターミナルのデータベースから抜粋）

その１　目覚めと出会い？

レンは夜の心地よい風と生き物達の綺麗な鳴き声で目を覚ました。

「…っ」

咄嗟に立ち上がろうとしたが途端に体中に激しい痛みが走り、思わず転がりそのまま仰向けになる。

（そういや俺…）

レンは目を覚ましてから徐々に蘇る記憶と同時に人を恨む怨念の気持ちもぶり返していた。

「…クソッタレが」

そしてレンは死のうとしていた事まで思い出し、そのまま自殺願望に変わったそれはレンに僅かながら力を与えた。

しかしレンはここで気づく。

自分の神機がない事に。

いや、正確にはあるのだが。神器が１つ。

しかしその神機にレンは見覚えがない。

そこにあるのは白と赤のまるで燃えるような熱気を放つ1つの神機。

「…誰の神機だよ…」

レンは嫌に鮮明に残る元仲間の神機でもないなと考えつつ、どうせ死ぬために使うんだからと考えるのをすぐに止めてしまった。

（他人の神機なら拒絶反応で運良く死ねるかもな）

昔そう学んだ事を思い出しながらレンは何もためらいもなく神機に手を伸ばす。

（あぁ。今思えばほんとクソッタレな世界だったな。

生まれてからすぐに死んだ親は思え出せないしお陰で小さい時から神器使い開発のためのモルモット。

なかなか適合しない新型に無理矢理適合させるために毎日実験と薬漬けだったけな。

しかもやっとの思いで適合しても実力も何も無い俺はほんとに底辺だった。

それでも悔しくて努力したけどそれも無駄だった。

結局最後の最後まで道具扱いだったな。

あいつら喰われたかな？喰われればいいのに。

それが最後の願いかな……）

自分の人生を振り返りながらレンは遂に神機に触れる。

（来世があるならアラガミになって幸せな奴らに報復してぇな……）

「あばよ。クソッタレな世界」
レンは最後にそう呟きおもむろに見知らぬ神機の拒絶反応を出す為に強く、強く握った。
神機はそれに応えるかのように握られた瞬間コアが強く光だした――

『…生きろ』
「…え？」
レンはいつまでたっても来ない拒絶反応に変わっていきなり聞こえてきた意味不明の言葉に意識を向けた。
『お前はまだ本当の幸せを知らぬ。
そんな奴に死ぬのは許されん。生きろ』
突然の説教とこちらの意思を完全に無視した発言にレンは少々苛立つ。
「…なんだと？」
『そんなつまらん事で死のうと思うな。
よく考えろ』
レンはこちらの気持ちを完全に無視した説教に遂に怒りが頂点に達した。

「フッざけんなよっ!?誰だか知らねぇがお前に何が分かるんだよっ!?どんなに努力しても誰にも認めてもらえない虚しさと悔しさがよぉ!?俺だってこんな人生イヤだよっ!!やり直せるもんならやり直してぇよ!?でもやり直したところで何になるってんだ!?俺はこの憎しみにとらわれたまま人を信じ愛しろと!?

それこそ生き地獄だ!!

そんな人生歩むくらいならいっそ死んだ方がマシだろーがっ!!

なぁっ!?」

レンはすべての胸のうちを晒す。

レンは決して絶望だけで死に急いでる訳ではない。

レンはこわいのだ。

これからやり直し、再び同じ立場に立ったとしても同じように人を愛せるわけが無い。

きっと人を信じれずに毎日疑心暗鬼で暗い毎日を送る。

レンはそれが怖い。そんな自分とそこから生まれる不幸と災いが怖いのだ。

「見知らぬあんたにこの気持ちが分かるかよ……っ。」

『わかるさ。俺だってそうだった。』

「なに?」

『俺もお前見たいに裏切られて絶望して人として生きる道を捨てた身。自ら望んでアラガミになって報復してやるつもりだった。』
「アラガミだと…？」
『そうだ。しかし現実は辛かったさ。人として生きていた頃より蔑む目で見られる毎日、毎日お互いに命の奪い合い。これは予想以上に辛くて俺の心が本当の意味で壊れるのもそう難しくなかった。俺はいつの間にか人の時の意思を忘れ、ただただ喰うだけの毎日になっていた。』
「喰う…だけの毎日…」
『そうだ。だがそんな時お前と出会った。俺が人間だった頃の目と同じ絶望仕切った目。アラガミに向かって自由になりたいと呟く姿。俺は目を覚まし、お前を助けようと思った。』
「お前、もしかして……ハンニバルなのか？」
『おうよ。そして今は姿が変わり神機と化してお前に強く握られているハンニバルさ。』

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ここは淡い紫紺色の空に数々の島々が浮かぶ世界『フロニャルド』。

その島々から流れる滝と空から差し込む光によってこの世界はとても幻想的な空間を生み出していた。

そんな世界にある国の1つ、ビスコッティ共和国。

今この国の城の空気はいつもに比べて重い雰囲気となっていた。

―城内の会議室。

この部屋は他にもまして重い空気が漂っていた。

今この部屋には8人の人間―と言うより獣人がいた。

その中でも明らかに年寄りといえる人物達がこの重い空気の中口を開いた。

「…本当にレオン閣下はどうなされてしまったのか……」

「これではまるで本気で我がビスコッティを侵略する気としか……」

「それはないと思いたいがのぉ……」

弱音を吐く年寄りの3人。

今この国ではまさに戦をしようとしていたのだ。

この世界の戦とは決して血の流れる様な残酷な戦い等ではなく、簡単に言えば国を上げてのスポーツの様なものだ。

しかしながらこの国―ビスコッティ共和国はここ最近戦の連続だった。

しかも連敗続き。最終手段でもある勇者召喚によってようやく2連勝を遂げたばか

りだ。
そんな疲弊した王族とその仲間達に休む間もなく２つの嬉しくないニュースが届いた。
１つは再び隣国、『ガレット獅子団領』からの宣戦布告。
しかも今回の戦は普通とは違い、大きな物を掛けての戦。
お互いの国の聖剣である。この聖剣はそれぞれの国に必ず２本存在し、国の象徴ともいえる国宝だ。それを賭けるという事はまさにお互いの国を賭けていると言っても過言ではない。それを隣国であり、友好国でもある『ガレット』は賭けてきたのだ。流石にビスコッティ側も同等のものを賭けるしかない。
ビスコッティはこれだけでも大きな負担になるのにその宣戦布告の半日前程の深夜にもう１つの大きな問題が発生していた。
突然現れた羽根のないドラゴン。
そのドラゴンは突然現れ、再び姿を消したと言う。
元々深夜に現れた為に目撃情報は少なく目撃したものもとてつもない巨体とその神々しい見た目に声もでなかったらしい。
目撃情報曰く、それは城と同じ程の背丈があり白と赤のまるで鎧を纏ってるかのような姿だったと言う。

そして最も特徴的だったのが羽根がないこと。
故に突然現れて突然消えたことにより一層謎が深まったという。
そんな謎のドラゴンが突然攻めてきたら一体この国はどうなってしまうのか。
そんな思いがみんなの気持ちを不安にしていた。
故に2つの問題がビスコッティの城内を重い空気に変える理由となっていた。
「本当にどうしてしまったものか…」
「兄上……」
取り敢えず開いた会議も解決策は全く生まれず、ただただ不穏な空気と時間だけが過ぎていった。
ビスコッティのロラン騎士団長とその妹のエクレール親衛隊隊長も流石に頭を悩ませている。
しかしながらこんな重い空気の中、この国の姫—ミルヒオーレ姫だけは自分のなかで判断を下していた。
「皆さん、この国の事を真剣に考えてくれてありがとう」
「姫様……」
「大丈夫！私達には勇者シンクもついてます！どちらの問題も皆で頑張って解決していきましょう！」

「あのへっぽこ勇者か……はぁ」
「ど、どうしたのエクレール!?」
「いえ、申し訳ありません姫様。アイツの馬鹿さには少々疲れてきたなと思ってしまっただけです。はぁ」
「アハハ…、と、とりあえず羽根のないドラゴンの方は後にして宣戦布告の方の問題に先に取り掛かりましょう！これは私の勘なのですがあのドラゴンは悪者のような気がしません」
「それは拙者も同感でござる。あの竜からは悪意は感じられなかったでござるよ」
「あの天下のダルキアン卿がそうおっしゃるならきっと大丈夫でしょう」
「ですので、先にガレットとのこの嫌な戦を終わらせます！
　受けましょう宣戦布告！そして必ず勝ちましょう！」
　その後、ミルヒオーレ姫の宣戦布告の承諾によって国は一気に戦モードとなっていき、すぐにドラゴンの噂はかすれていくのだった。

その2　波乱の予兆

ミルヒオーレ姫の宣戦布告受諾から4日後。
両国の知らぬ土地にて一人の青年―レンが人の地を求めて旅をしていた。
正確にいえばもう1匹いるのだが。
とりあえずハンニバルの説得によって死ぬのは考え直したレンはハンニバルとこの世界について色々と考察していた。
「なぁハンニバル」
『なんだ相棒』
「相棒て…。お前とそんな仲良くなった覚えはないぞ？」
そうは言いつつ満更でもないレン。本当に直前まで死のうと思っていた人間ではないくらいに精神的に元気になっていた。
『まぁそう言うな。こんな知らぬ土地ではそんな隔たり何でもなかろう。この不思議な土地ではな』
「まあな。だってお互い腹減らないだもんな」
そうなのだ。何故かこの2人？はこの土地に飛ばされてから全く空腹を感じておら

ずこの４日間まったくの飲まず食わずで過ごしている。
『全くだ。オラクル細胞の塊である私はまだ理解できるが相棒までとはな』
「いやいやいや、お前も全く理解出来んわ。だってこの土地、オラクルが全く感じられないんだぞ？だから俺なんか『コイツその内腹減って俺喰うんじゃね？』とか思ってたからな」
『私もそう思っていたんだがな。』
「え？まじ？」
『冗談だ。』
「だ、だよな。安心し『多分』たぜ…って、え？」
『フッ、冗談さ。だが本当に不思議だ。しかも未だに他のアラガミとは出会っておらんしな。もしかしたらここは最早時空を超えての別世界かも知れん…』
「こ、こえーよ……。てかいきなりスケールでかくなり過ぎだろ！」
『まあお互い空腹にならないってのは有難いな。食に困らん』
「お、おう。華麗にスルーしたな今」
　この１人と１匹は意外と相性がいいのかもしれない。ハンニバルの方はその事にどことなく気づいている。
『相棒は食も大事だが偏食因子の方は大丈夫なのか？』

これはレンにとっての大きな問題である。
本来ゴットイーターは定期的に偏食因子を取らなければいけず、もし怠ると生死に関わる事となるのでゴットイーターにとっては寝たり食べたりするのと同じくらい大事な事だ。
しかしレンの体に未だに異変はない。
「んーそれなんだが今の所何ともないな。でもまだ4日目だしなんとも言えないとこだな」
『そうか…。まあ何かあったらその時は私を使えばよかろう。そんな事より相棒、気づいてるか?』
「使うってどう使うんだよ…。気づいてるってなんにだ?」
突然、ハンニバルがかなり真剣そうに語りかけた為レンもそれに答えて真剣になる。
『分からんか?お互い以前より仲良くなってると思わんか?』
ズルッ。
「そんな事かよ!?まあそりゃお互いこんな見知らぬ土地で喋るやつもいないしな!そりゃ嫌でも仲良くなるだろ!?」
『そうか。それは何より。あと一つ気づいたことがあるのだが』
ハンニバルは再び真剣モードにはいる。

「またしょうもない事だったら俺死ぬから」
『重いな……。本当に自覚ないのか？』
「何をだ？」
『お互いの力も以前より上がっておらんか？』
「…なに？」
『例えば私だったら自在に姿を変えれるようになったぞ』
「へぇー。例えば？」
『まぁ主に自分の記憶にあるものだけだな。色々な種類のアラガミだとか様々な神機の形にだとかだな』
　ハンニバルのこの力は最早無敵と言える。状況に合わせて様々なアラガミへと変わりいざ戦闘となれば常に有利に戦えるという事である。そして武器に変わることによって人の目や敵の目を欺く事も可能だろう。
「なにそれ。めっちゃ凄いじゃん！」
『そうだろう？私もびっくりしている。だがお前から感じるオラクルもだいぶ強化されている』
「と言うのは？」
『恐らく全体的な身体能力の強化とブラットアーツの取得だろうな』

「ブラットアーツ？何それ？」
『相棒は知らんのか？本部のＧＯＤＥＡＴＥＲ達が使う必殺技のような物だ。血の力に目覚めることによって個人によって能力は異なるのだが色々な攻撃に強化を加えることも出来る。アレにはだいぶ苦戦を強いられたものだ』
　ちなみに身体能力の強化のレベルとしては以前よりも格段の攻撃力強化と体力の上昇。そしてスタミナの倍増により回避やジャンプ、全力攻撃の連続や回復が格段に強くなった。おまけに回復力も超過し最早自己再生が可能なレベルだ。
　言うなれば最早人の域を超えた存在と言える。
　この事にレンたちが気づくのは時間の問題だ。
「それはすごいな。ちょっと試してみたいな」
『まあいずれな。…それより相棒、近いぞ。』
「近いって、何がだよ？」
『人の気配だ。これは３万…いや、４万は下らんか？』
　ハンニバルは強化された鼻と耳、そして五感から人の気配を感じ取っていた。最早それは武器の状態でも何の問題もないレベルに。
「そんなに？国が近いのか？」
『いや、国とは違う雰囲気だ。これは…なにかの試合か？』

「試合？そんな大人数でか？」
『うむ。恐らく国対抗でなにかしているのだろう。しかしそれと別になにか邪悪な気配がしている』
「なに？」
　レンはハンニバルの嫌な予感とやらに敏感に反応する。
『これはアラガミとは違うな……。なんだこの禍々しい気配は？』
「なんだか天気も怪しくなってきたしな…」
『雨天の場合はまかせたまえ。私がもとの姿に戻って雨避けとなろう』
「……なあハンニバル」
『なんだ相棒？』
「いや、今更なんだがお前元の姿に戻れるなら俺を背中に乗せて移動してくれればこんな何日もお前を持って移動しなくても良かったんじゃないか？」
『…』
「…」
『……』
「…おまえって、結構馬鹿だな」
『……喰うぞ』

「あい。ごめんなさい」

本当に気の合う2人なのかも知れない……？

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

―ビスコッティ共和国国境付近。

今日は遂に隣国『ガレット獅子団領』との大戦の日だった。

戦が始まり早数時間。太陽は空の頂点を超えて午後になり日が少し傾いたぐらい。

遂にお互いの兵士がぶつかりあっていた。

そして両国の様々な作戦や戦術を駆使した戦いはビスコッティ側の若干有利のまま、終盤にへと差し掛かっていた。

勇者シンクと親衛隊隊長エクレールが率いる第二部隊は遂にガレットの本拠地でもある『砦』への侵入を遂げているのだった。

「おいへっぽこ勇者!まだまだ力は有り余っているだろーな？」

「モチロン!まだまだ元気いっぱいさ!あとはそのヘッポコはやめて欲しいな…」

「ふん。事実なのだからしょうがないだろう？」
「ひどいよエクレぇ。」
　ちなみに今侵入したこの一同は階段を駆け上がりながら会話している。
「ふふ。本当に２人とも仲がよろしいですね♪」
「「よろしくありません!!!」」
「あら、それは失礼しました…」
　しゅん……
「ひ、姫様!?違うんですこれは!?…おい勇者！姫様が落ち込んでしまったではないか！」
「ええー!?僕が悪いの!?ご、ごめんなさい姫様？」
「ふふっ、冗談です♪それよりそろそろ着きますよ？」
　遂に一同は砦の最上階にある闘技場に登るためのエレベーターまえにたどり着くのだった。
　一同は知らない。これから起きるとてつもない波乱と地獄を……。

その3　戦場へ

　レンとハンニバルは嫌な予感がしていた。
　その嫌な予感は自然とレンとハンニバルを急かしている。
　今は先程の歩くペースをかなり凌ぐ速さで走りながら森の中を進んでいた。
「それにしても、ほんとに天気怪しくなってきたなぁ」
『……』
「どうした？」
『…相棒は感じんか？この嫌な空気』
「んー、確かに感じるな。雨が降る前とは違う、なんかシケってるよな」
　アラガミと退治した時とは違う、嫌な感じ。
『確かにな。これは絶対に天気のせいではなかろう』
「わかっている」
『あの雲……、アラガミとは違うがなにか邪悪なものを感じる。あれはあまりいいものとは思えん。』
「そんなにか？」

『ああ。むしろ邪悪という点に関してはアラガミなんかよりタチが悪い。アラガミは殆ど本能であらゆるものを『喰う』がアレは違う。まるで悪い事をする為の存在と言うべきか……。アレは今後放置していていいものではないのは確かだ』
「それは確かにヤバイな……。どうする?」
　レンははなからどうにかするつもりだったが、一応確認を兼ねて聞いてみた。
『うむ。幸いあの雲には核のような存在を感じる。それを追えばなにか分かるかもしれん』
「そうか……。ならその核とやらを追うぞ」
『ああ。だがアレはやはり雲なだけあって移動が速い。ここからは私が走ろう』
「了解。てか最初からそうしてくれよ……。」
『ふん。ゴットイーターが怠けるんじゃない。』
「おまえも元々そうだろうが!?」
　むしろ明らかに人間より強靭な力を持つアラガミがサボってどうすんねんと突っ込む。
『わかったわかった。後で愚痴はいくらでも聞いてやるから取り敢えず俺から離れてくれんか?』
「チッ……、まぁいいや。ほらよ…っ!」

レンはその場に神機を突き立て、後ろに素早く下がる。
ハンニバルだった神機はコアが突然輝き、まるで神機が生きてるかのように動き出した。
そして神機から溢れ出るオラクル細胞はやがて神機の原型を崩していき、そのまま巨大化してハンニバルのカタチへと変化していく。
「……凄いな」
レンは改めて神機が武器でなく生きてるアラガミだという事を実感した。その頃には黒い塊のオラクル細胞は色づいてきてハンニバルにへと完全に変化していた。
「なんかその姿を見ると緊張してしまうな」
「ガァ。」
「え？なに？」
「……。」
「…どうした、黙りこんで」
先程までアラガミとは思えない程喋りまくっていたハンニバルは突然黙り込み、レンをじっと見つめていた。
（もしかして、理性が飛んだのか…？）
そう考えたレンは警戒心を増す。

その時、突然ハンニバルが動き出してレンに手を伸ばした。
連は咄嗟に下がろうとするが、ハンニバルは逃がすまいと言わんばかりに腕を伸ばしてレンを掴んだ。
「っ!?おい！離せよ!?この野郎!!」
『落ち着け、相棒。喰うつもりはない』
「え？」
『理性はうしなっとらん。ただ言葉が通じんかっただけだ』
「なんでだよ？さっきまで喋っていただろう？」
『恐らくお互いが触れていないと会話が出来ないのだろう』
「なるほど。そういう事か。いやー焦ったーーっ。」
『生きろと偉そうに言ったやつが殺しては洒落にならんからな。そんなことはせんとこの命にかけて誓うさ。信じろ』
「そうかよ…。で、さっきはなんて言ったんだ？」
『ん？ああ、喰ってやろうかって言ったんだ』
「……オレモウオマエシンヨウデキナイ。」
『え!?』
「冗談だよ。さぁ行くぞ！」

『そ、そうか……。それでは乗れ！駆け抜けるぞ!!』

「おう!!」

レンはハンニバルの背中へと乗り、森の中を凄まじい速さで駆け抜けていくのだった。

ここに、最強の騎士が誕生した瞬間でもあった。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「ここから私1人で行きます」

ここはガレット獅子団領の本陣構えるグラナ砦。

その中に対戦国であるビスコッティ共和国のミルヒオーレ姫様と勇者シンク、親衛隊隊長エクレール率いる第二部隊が見事侵入を果たし、遂にガレットの大将レオンミシェリ閣下がまつ最上階の闘技場へ上がる為のエレベーターの前にたどり着いていた。

「姫様！流石に無茶です！相手はレオ閣下ですよ!?」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫、私はただ……、レオ様と話がしたいのです。何故このごろ昔のように接してくれなくなったのか、何故戦ばかりされるのか……。それを聞きに行きたいだけなのです」

「姫様……、わかりました。我々はここで待ちます。姫様も気をつけて」
「エクレがそう言うのなら僕も。姫様、お気をつけて」
「ありがとう、エクレール、シンク！では、行ってきます！」
そう言って姫様はエレベーターに乗り、最上階をめざすのだった。
その頃最上階では、ガレット獅子団領のレオンミシェリ閣下が勇者シンクと親衛隊隊長エクレールを待っていた。
（ここで両方共に打ち倒し、勇者から神剣パラディオンを奪えば……っ！）
レオ閣下はただ、それだけが望みだった。
そうすれば自分が読んだ星読みの未来を回避できると。
しかし、未来はそう簡単には変えられない。
レオ閣下の希望を打ち砕くかのように最上階にたどり着いたエレベーターの扉が開く。
「おじゃま致します、レオンミシェリ閣下。」
そこにいるはずの無い、そこにいては行けない筈のミルヒオーレ姫がそこに聖剣エクセリードを携えて佇んでいた。
レオ閣下はそのあってはならない筈の光景に驚愕し、同時に脳裏に焼きついた親愛のミルヒオーレ姫が死ぬ星読みの映像が走馬灯のように頭をよぎる。

「レオ様が国の宝剣を賭けて戦われるのであれば、私も聖剣を持って戦わなければならないと思い、勝手ながら推参致しました」

何も知らないミルヒオーレ姫は堂々たる姿でレオ閣下の前に歩み寄った。

対するレオ閣下は、自分の星読みと全く同じ状況になりつつある事に驚愕と恐怖を隠せずにいた。

その間にも、この場に同席していたガレット獅子団のメイド長であるルージュは隙を狙ってミルヒオーレ姫に攻撃をしかけ、聖剣エクセリードを奪おうと試みた。

しかし、それはミルヒオーレ姫の強い意思に反応し本来の力を取り戻した聖剣エクセリードによって拒まれてしまうのだった。

そして遂に、お互いの聖剣と宝剣を賭けて戦おうとした瞬間だった。

突然、闘技場の上空の黒い雲が渦巻き出したのだ。

と同時に、闘技場が砦から離れて上空にうかびだした。

そして、

渦巻きの奥から、禍々しい雰囲気の卵のような物が姿を現したのだった。

時は少し戻り、砦付近の森の中。

セルクルを大きく超える速度て移動している騎士、レンがいた。

「ハンニバルっ!!」
『わかっている!!』
　レンたちが目指していた黒い雲の中心の核に向かって進んでいた時だった。
　その核が自ら雲の中から姿を現したのだ。
　どす黒く、どこか卵の様な雰囲気の核は誰から見てもヤバイものだと分かるほど禍々しいものだった。
『……っ！レンっ!!』
「なんだ!?どうした!?」
『あの核の真下の砦に人がいる!!このままでは危険だ!!』
「なんだと!?」
『このままでは間に合わんかも知れん!!姿を変える!!』
「わ、わかった!!」
　レンはすぐにハンニバルの背中からどいた。
　レンが降りたのを確認したハンニバルは新しく手に入れた変幻自在の能力により、より足が速いものを想像する。
『（最も速いとなるなら……っ！）』
　ハンニバルは思いついたアラガミをすぐに想像し、己の姿を変えていく。

速さを求めるなら自然と4足の獣型。紅蓮の炎を前脚に纏いながら白いライオンのような毛並をはためかせて走るその姿はハンニバルの記憶に強く根づいている。

変化を始めたハンニバルの姿は以前と同じように、しかし以前より明らかに早くその変化を遂げていく。

そして変化を終わらせ、元ハンニバルはその場に佇む。

「マ、マルドゥーク…っ!!」

「クオォォォォォンッ!!!!」

完全に変化したことを伝えるかのように力強い咆哮を見せたマルドゥークは、しゃがんでレンを背中に乗せる。

その瞬間、マルドゥークに触れたレンはマルドゥークに話しかける。

「凄いな…。ホントに変化できるとは……。」

『実は私もこうも簡単にできるとは思わなかった。さぁ行くぞ!』

「了か……っ!」

マルドゥークはレンの答えを待たずに一気に駆け出した。

ほかの生物を凌ぐ大きさと先程までの速度を超えた速さで一歩一歩大地を踏みしめるように走るその姿は正しく『神』の名に相応しい姿だった。

少し走った所ではるか前方に2体のセルクルとそれに乗る2人の女性の姿をレンは

確認した。
片や金髪に昔の忍者のような格好をした娘と、片や隣のセルクルよりはるかにデカイセルクルに乗り、昔の武士のような格好をした女性。
その２人は後ろから伝わってくる振動に気づいて振り向いた。
「お、お館様!!」
「な、何でござるかアレは!?」
隠密隊頭領ダルキアン卿と隠密部隊筆頭ユキカゼははるか後方からやって来る得体の知れないものに驚きをあらわにしていた。
まるで獅子のようでありながら神々しさ兼ね備える姿。
それは先かなり速く移動していた自分達にどんどん近づいてることに気づいた。
「何という速さでござるか!?」
「このままでは追いつかれるでござるな……。ユキカゼ、奴から魔物の気配は?」
「お、お館様。それがまったくしないのです。恐らく魔物ではないかと」
「なんと……っ！しかしあんな狼見た事がないでござるな……」
「せ、拙者もです。お館様、どうされますか?」
「……魔物ではないとは言えど邪魔されては困るでござる。ここで食い止めるでござるよ!!」

「御意!!」

「どうする!?前のお二方はやる気満々だけど!?」

レンは走りながら確認していた前方の2人が臨戦態勢に入ってことに気がついた。

『今はそんな暇はない!!跳ぶぞ!!』

「……っ!了解っ!」

マルドゥークは走りながら後ろ脚に一気に力を込め、一瞬で上空に飛び上がった。

その飛距離は前で構えていたユキカゼとダルキアン卿の攻撃範囲内を悠々と超えていた。

「なっ!?」

「……っ!」

突然の物凄い跳躍に付いていけずに2人はみすみすと謎の狼を逃したのだった。しかしそれよりも2人はさらに驚きの事実にきづく。

「……お館様」

「……ああ。ユキカゼも気づいたでござるな」

(人が…乗っていた)

ダルキアン卿は物凄い速さで遠ざかる姿を見届けながら、一瞬だが見えた謎の狼の背

中に乗っていた人物の正義に満ちた顔をみて少し安心したのだった。

レンが遂に森を抜けた時、砦の上の核は既に姿を変えていた。
それはキュウビのような姿でありながらはるかに大きく禍々しい邪気を放っていた。

『……くっ。』
「どうした!? 調子悪そうだけど!?」
レンは物凄い速さのおかけで起きた風圧の中、自然と声は大きくなっている。
『……やはりキツイな』
「なにがだ!?」
『この姿を保つ事がだ。同じオラクル細胞とはいえ全く異なる性質や形ではやはり結合能力が下がる。このままでは自然消滅してしまうかも知れぬ』
「なに!? 大丈夫なのか!?」
『あの砦の上までは持ちそうだがそれ以降は厳しい。幸い神器の姿なら私はエネルギーを消費しなくて済む。だからお願いがある。』
「…もしかしておれが神機を使って戦えってことか!?」

『そうだ。因みに拒否権はないぞ？なに、いまの相棒なら必ずできる。目視で確認した感じでは今の君の方がはるかに強い』
「おうよ!!勿論やってやらァ!!」
『よしっ!!なら私は責任を持って君を安全にあの場まで運んで見せよう!!』
「頼むぜ!!」
もう砦は目前に迫っていた。

その４　参上?

勇者シンクと親衛隊隊長エクレールは登っている、
エレベーターではなく壁を。
「おい勇者!?やっぱり無理があるだろ!?」
「だから無理してついてこなくていいって!!」
２人はがこんな所を登っているのは勿論だが理由がある。
かれこれ数十分前。

「んー…、んー…、大丈夫かなぁ、姫様」
シンクはやはり姫様が心配なのか、先程からずっとエレベーターの前をウロウロしていた。
「落ち着け勇者。お前は姫様を信じて待てんのか?」
「そう言うエクレこそ。尻尾」
シンクが指さす先には、犬種ならではの特徴、『興奮すると尻尾が揺れる』と言う状態にまさになっているエクレールの尻尾があった。

「え?……いや!これはちがってだな!?」
慌てて尻尾を隠そうとするエクレールだが既に遅し。
「と、とにかく!姫様が1人で行くと言って行かれたのだ。ならば我々は信じて待つしかなかろう」
「うーん、確かにそうなんだけど……。なんだか嫌な予感がするんだよなぁ」
「……しかしだな」
そう言うエクレもどことなく嫌な予感はしていて、行きたいのは山々なのだ。ただ言い出せないだけなのだが。
「あ!そうだ!!」
突然シンクが思いついたかのように声をあげる。
そして突然窓から上を見上げたのだ。
「ここなら登れそう!エクレ!!」
「な、なんだ勇者?」
「僕はここを登っていくよ!!姫様は1人で行くっていたんだし、その後をついて行っても問題ないよね!」
突然の勇者の行動とその意味にエクレールは驚き、半分呆れ、半分感心する。
「この屁理屈勇者が……。待て!!私も行く!!」

そして結局二人して仲良く登ることとなったのだ。

時は戻り……

「む、無理なんどしとらんわ!!勇者こそ無理してるんじゃないか!?」

「な、なにをー!?なら上まで勝負だエクレ!!」

傍から聞けば何とも可愛いらしい争いをしてるようだが、２人が登っているのは本来、エレベーターであがっても1、２分はかかる高さだ。高さがある分地上からの高さも比例して高くなる。勿論命綱もある訳でもなく、２人は己の腕力だけで登っている。

こんな様子を見てると如何に２人がとんでもないかよく分かる。

因みに２人が言い争いをしていたのは丁度真ん中らへん。しかし２人は親愛なる姫様の為に速度が落ちることは無かった。

しかし、彼らは段々と近づいてくる地響きに思わず動きを止める。

「な、なんだいこの地響き?」

「わ、私にもわからん……」

「な、なんか物凄く嫌な予感がするだけど……」

堪らず２人が地響きがしてくる方向――後ろを振り向くと……

「「何じゃありゃぁ!!?」」

正確には斜め下。ちょうど砦の麓。

1匹の巨大の狼がこちらに向かって走ってきていたのだった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

『レン！間もなく到着だ！』

「おう!!着いたら後は任せな！」

レンとマルドゥークは遂に森を抜け、砦の麓付近まで迫ってきていた。

『最後は壁を登るからな。しっかりつかんどかんと振り落ちるぞ』

マルドゥークが最後にとんでもない事を呟く。

「おう!!まかせと……って、え?」

レンは耳を疑い、聞き直す。しかしマルドゥークは再度答えることはなく、そのまま一気に砦に近づく。

『さぁ！一気に駆け上がるぞ!!』

「ちょっとまっ……あああああっ!?」

砦の麓に着いたマルドゥークは一気にその場を跳躍し、一瞬で先程までシンク達がい

たエレベーター乗り場の階を超える。
　いくらオラクル細胞で鍛えているとはいえ元は人間。とてつもない重力と風力、揺れに半分浮いた状態になってしまう。
「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬっ!?てか俺もうぶら下がってるだけなのお気づきですか!?足浮いてますよ!?股が涼しいんですよぉぉぉっ!!」
『おい、レン!!』
「え!?なに!?気づいてくれたの!?」
『何を言っている?そんな事より、途中壁に人がいる!!ついでに回収するから上に着いたら説明を頼む!!』
　勿論その２人とは勇者シンクと親衛隊隊長エクレールなのだが、２人に知る由はない。
「そ、そんな事って!?生命の危機ですよ!?でも了解するしかないんですよねはい了解です!!」
　そのままマルドゥークは壁を半壊させながら一気に駆け上がっていく。途中、マルドゥークが壁を登る勢いによって吹き飛ばされそうになった２人組、シンクとエクレールを首付近から生えてる触手で回収しながらさらに速度を上げていく。
　そして遂に頂上にたどり着く直前――。

この場の中でレンだけが気づいた。
浮いている闘技場から1人の人間が落ちてきていることに。
「おい！相棒!!」
『お？なんだ、遂に相棒と認めたくれたか？』
この場まで来てもマルドゥークに緊張感はない。
「そんなんあとでいくらでも認めてやる!!お願いがあるんだ！」
『なんだ？ここに来て？』
「先に言っとくがなんで？とか返すなよ！頂上に着いたらそのままの勢いで俺を思いっきり真上にぶん投げろ!!!」
『なんで……と、わかった。やってみよう！』
マルドゥークはつい反射的に返しそうになった所を我慢し、取り敢えず了解した。
「頼んだ!!」
『だが頂上に着くと同時に私は活動限界だ！神機に戻ってしまうからチャンスは1回だぞ!!』
「おうよ!!分かってらぁ!!」
『ならば私のタイミングで握っている手を離すんだ！いいな!?』
「わかった！あ、落とすとかはなしな？」

やはりレンもここまで来ても緊張感はない。
『うるさい!!少しは私を信じろ!!レン!!行くぞ!!』
「落としたらぜってぇ許さんからなぁ!?」
『今だ!!離せ!』
「どうにでもなれぇ!!!」
頂上に着いた直後に手を離す形となったレンは上がってくる時の勢いのまま上に打ち上がる。
しかしこのままでは勿論届かない。レンは失敗かと思いマルドゥークの方に向きを変えた時。
目の前に大きな後ろ足が迫っていた。
「へ?……イヤイヤまて!?それはかなり痛い気がする!!」
マルドゥークはレンを上げた後、さらに後ろ足で蹴りあげるつもりだったのだ。
「クオォォォン!!!」
「お前おぼえとけっ……ぐふうぁっ!?」
あまりの光景にその場にいたシンクとエクレールは開いた口が塞がらない。
「いってぇ……、っ!」
レンはやっぱり痛かったのか、空中で悶絶するがそんな暇もない。空中から落ちてく

る人は目の前に迫っていた。
マルドゥークがあらかじめ蹴る時に調整してくれたのか丁度落下ルートで構える形が取れた。が、
当たり前に考えて空中で受けてもなんの意味もなく、
（あれ？これって不味くない？）
気づいた時には既に遅く、空から浮いた闘技場から落ちてきた女性――レオ閣下と接触し、ほとんど威力を弱める事もなくそのまま落下していく。
「あああああっ!?洒落ならんぞ!?マルドゥーク!!助けて、く…れ…？」
堪らず地上にいるはずのマルドゥークに声をかけるがそこにいたのはついでに拾った２人組のみ。
（あれ？マルドゥークさん？）
よく目を凝らして探すと、そこにあるはずの無い神機が１つ。
「……」
レンは呆れに呆れてそのまま一言も発すること無く地上に落ちるのだった。一応人助けを忘れてなかったので自分が下敷きになりクッション替わりになるようにして。

シンクとエクレールは先程から開いた口が塞がらなかった。
それは突然現れた巨大な狼から始まり、その狼に人が乗ってると疑問に思えばこちらに登ってき、そしてついでかのような流れで狼にあるはずが無い触手のような物で拾われ、もうダメかと思えば地上についた所で狼に乗っていた人は蹴り挙げられ、狼は黒い肉塊となりそのまま縮小して武器のような形になってしまったのだ。
驚かない方が不思議だ。これで驚かない人がいればその人は感情が死んでる人だと密かに思うシンクとエクレールだった。
そんな事を考えているあまりか、空から降ってくる人にも気付かず。
ドオオオオンッ!!
「うわぁ!?」
「な、なんだ!?」
突然目の前に何かが落ちてくるような形になってしまった。
落ちてきた衝撃で白煙がまう。
そして時間と共にそれが晴れていくと、中には二人の人物がいた。
片方は先程の謎の人物。
そしてもう片方はこの国なら誰もが知る、レオ閣下だった。
「レ、レオ様!?」

「レオ閣下!?」
しかもかなりダメージを負っており、満身創痍の状態だった。
堪らず勇者シンクが近づく。
「レオ様!?大丈夫ですか!?」
「っ……、お、おお、勇者か?何故ここに?」
シンクの声が聞こえたのか、目を覚ました聞き返すレオ閣下。
「なんだか嫌な予感がして……、それで姫様を助けに来たんです!」
「姫様……?……っ!!そうじゃ!!勇者よ!!頼む、ミルヒがっ、ミルヒが!!!」
レオ閣下は突然、何かを思い出したかのように気が動転しだした。
「お、落ちついて下さいレオ様!姫様が一体どうしたのですか!?」
かなり動揺しているレオ閣下を見かねたシンクが取り敢えず落ち着かせようとした時だった。
「そーそー、落ちついて取り敢えず俺の上からどいてくれると嬉しいなぁ?」
レオ閣下の下からもう1人の謎の人物の声が聞こえたくるのだった。
「「っ!!!」」
満身創痍の筈のレオ閣下が驚いてその体を横にずらした。
すると、そのまま下敷きになっていた謎の男――レンは、まるで何事も無かったかの

ようにスッと立ち上がるのだった。

その5　魔物退治開始、速攻終了

レンは死を覚悟していた。
どんな人でも空中１００メートル近くから落ちれば死を覚悟するものである。
なんだかんだいって結局死ぬのかと思いながら落ちる直前には意外と冷静になっていた。
そして落ちた。
が、全く無傷。一応人助けをしており、レンの上には人が一人いたのだがそれでも痛くも痒くもない。
（ほ、ホントにオラクル細胞とは別のもので身体が強化されてる？）
そんな呑気なことを考えてると上の人が目を覚ました。
と、それを見ていた周りの人間は下敷きになって埋もれているレンには全く気付かず、しかしながらレンの上の人を心配して集まってきていた。
要するに、レンがいまとてつもなく出ていきにくいのだ。
する事もないので取り敢えず聞き耳をたてて会話を聞いている。
（この俺の上の人、王様なのか……）

なら、周りの人間がすかさず駆け寄ってくるのも当然。
聞き耳を立ててわかる情報は少ないが、この人が王様だという事と若い少年が勇者？だという事はわかった。
ともかく如何にしてこの気まずい状況から脱するかだが……
いつまでも気まずくて出て行きにくい状況が続く。
（てか、とある王様よ、俺の存在に気づかんのか？）
そんな事を心の中でボヤいていると、突然王様が血相を変えて勇者？に詰め寄っていた。
（んー…？どうやら大事な友人が攫われたっぽいな）
ソレを聞いた途端、レンはさらに焦りを感じ、遂に会話に無理矢理割り込んだ。
そして、無事発見して頂き取り敢えず初のお披露目状態。
周りの人間も怪奇の目で見つめていた。
（うぅわ、気まずい……）
ただレンがあの高さから落ちて無傷だから信じられない目で見られてるだけなのだが。
全身黒の衣服に金色のラインや装飾を施しており、黒いブーツにも同じ装飾があり、どこかの貴族のような格好。髪は長く吸い込まれるような深い黒。顔もかなりの美形

（レンは自覚ないが）でもはや女性か男性か分からないが恐らく声からして男だろうとレオ閣下達は推測した。

そして右手には赤くいびつなくらい大きい腕輪。

さらにあの高さから落ちても無傷で今もただらぬ雰囲気をかもし出している。（レンは自覚ないが）

勇者シンク、親衛隊隊長エクレール、レオ閣下以下メイド一名は取り敢えずとてつもない人だと瞬時に考えついた。

一番最初に口を開いたのはレオ閣下だった。

「……お主は？」

レンは相手からの突然の質問に戸惑う。

「え？ああ、えーと、神野レンと申します。職業はゴットイーターで、極東支部所属です。」

おかけで、思わず情報隠蔽することも無く正直に話した。

「…ゴットイーター？神を食べる者？何ですかそれ？」

しかし、まさかの返答にレンはゴットイーターとしての自信にちょっと傷つく。

「え？ゴットイーター知らないんですか？あれぇ、結構活躍しているつもりだったんですけど……」

「……聞いたこと無いですね。それとあの武器は？」
今まで様子を見るかのように黙っていたエクレールもさっきからずっと気になっていた武器について聞いた。先程までとてつもなく大きい狼かと思えば、突然縮んでいびつな武器になったのだから気になるのも無理もない。
「え？ああ、あれは神機。オラクル細胞で形成されてる生きた武器です」
「オラクル細胞……？て、生きてる!?」
エクレールはまさかの返答に、冷静をよそおっていたが堪らず驚きをあらわにする。
「はい……って、明らかに場違いな俺がいうのもなんですけど、何か急いでいたのでは？」
そろそろ質問タイムもいいかと思ったレンは最も重要な問題に触れた。それを聞いて思い出したのか、レオ閣下は再び焦り出した。
「…っ!!そうじゃ、ミルヒを助けなくては!?」
「レオ様、姫様はあの魔物に？」
（魔物？）
レンは聞き慣れない単語に疑問を持つが今はそれどころではないと頭の片隅においやる。
「そうじゃ……、我の実力不足なばかりに…」

「心配しないで！必ず僕が助け出して見せます！」
「私も、勇者と協力して姫様救出に向かいます」
「お主ら……、スマンな。頼む。」
　そしてシンクとエクレールが出陣しようとした時だった。
「あ、俺も手伝いましょうか？」
　レンも協力を推薦した。元からその為に来たのだから。
「お主……、レンといったか。すまないがよろしく頼む。人は極力多い方がいい。しかしあの魔物は強い。無理だけはするでない」
「ありがとうございます。それじゃ、早速向かいますね」
「え？」
　レンはそう言うと地面に刺さっていた神機を拾う。
『やっと拾ってくれたか。忘れられたかと思ったぞ？』
「うるさい!!あの蹴りだけは許さねぇからな!?」
「「!!?!!」」
　３人が驚愕してるのは傍から見ればレンが１人でいきなり大声をあげているように見えたからだ。
　しかしながらレンはそれに気づくこと無く、会話を続ける。

「今から戦闘っぽいけど、大丈夫だよな？」
『ふん。当たり前だ。もうパレッドも装填済みだ。取り敢えずハンニバルのアラガミ弾を装填している』
「了解。あと捕食モードであのバケモノの所まで届くだろ？」
『勿論だ。普通の神機なら厳しいが私は違うからな。ハッキリいって余裕だ』
「よし。なら早速行くぞ!!」
『おう!!レンの実力、しかと見せてもらうぞ!!』
「凄すぎてビビんなよ？行くぞ!!!」
　先程から気合入りまくりのレンとは裏腹に若干取り残されぎみのシンクとエクレールは気になっていた。
　レンがどうやってあの魔物の所に向かうのか。
　しかしそれはすぐにわかる。と、同時にレンのゴットイーターという職の意味もわかる瞬間でもあった。
「届けっ!!!捕食モードっ!!」
　レンがそう叫んだ瞬間、神機は変形し、内側からおぞましいドラゴンの口のようなモノが飛び出し魔物の所まで一気に届く。
　そのまさかの光景にその場にいた全員は絶句した。

そして遂にその口が魔物に届き、
「じゃ、お先」
そう言い残してレンは一気に魔物の所まで飛んでいくのだった。
「なんだ今のは!!?」
「す、凄いねぇ……僕には真似できないかなぁ」
まさかの行動に驚いたシンクとエクレールはしばらく固まっていた。
が、自分にも大事な役目を思い出した。
「ぼ、僕達も行かなくちゃ!!」
「あ、ああ!」
そしてシンクとエクレールはレンを追いかけるように魔物へと向かうのだった。
残ったレオ閣下は呟いた。
「一体、なにものなのじゃ……?」
それはレオ閣下が少なからずレンに興味を寄せた瞬間だった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

シンクとエクレールがようやく砦を出た時。

　既にレンは魔物の上へとたどり着いていた。道中、妨害もはいったがレンの身体能力だけで退けていた。
「ホントに強くなってんな……」
『そうだろう？ついでだ。ここでさっき試したいと言っていたブラッドアーツを試したらどうだ？』
「そうだな。取り敢えず目の前の狐のお化けと変な触手の武器を一掃したいな。武器はスピアで行こう」
『それがいいだろうな。なら私がオススメするブラッドアーツは突進を強化する奴だ。大体分かるだろう？』
　実はここにたどり着く前、レンの腕輪を経由してブラッドアーツの全てをレンの脳内に記憶させていたのだ。
　その為のスピアと言う武器の選択だった。
「ＯＫ。スピアに変わってくれ」
『おう』
　そう返すと神機は一瞬で黒い塊に戻り、また同じ速度でスピアに変わった。
「よし。コアの場所は……、あそこか？」
『そうっぽいな。速攻で決めれるな』

「ああ、あれぐらいの大きさなら捕食で一撃で終わる」
レンは一気に突進で詰め寄り、外皮ごとコアらしき所を捕食して終わりにするつもりだ。勿論、人助けという目的も忘れていない。
『おう。これであそこに囚われた人も助かるだろう』
そう、少し先の方に恐らく囚われた姫様らしき人物がいることも確認済みだった。しかし何も来ておらず裸のため、直視出来ないのだが。
「だな。よし、行くぞ!!」
そう言うとレンは一気にスピアの神機を構え、力を貯める。
それに反応した人機は段々とオーラを纏い、大きく広がるように変形する。
そして完全にためきったと同時に勇者シンクが遅れて到着した。
すぐに戦闘に加わろうとするがレンのとてつもない覇気に思わず声をかけずに止まる。
そして、
「行くぞっ!!ブラッドアーツ、『クリムゾングライド』!!」
紅いオーラを纏ったレンは物凄い暴風と共に一気に敵陣へと突進する。
「おおおおおっ!!」
肉薄した敵は反撃を試みるがあまりの勢いに止めることも出来ずに霧散していく。

そしてそのまま魔物の上にいた敵達はみるみるうちに消されていく。
誰にもレンを止めることが出来ず、全滅するのだった。
そのままの勢いで一気にコアらしきものに近づいたレンは突進の威力を生かしつつ、素早くスピアを引っ込め、捕食モードに変化させる。
「喰らえっ!!!!捕食っ!!」
コアに食らいついた神機はそのままコアを噛みちぎり、あっけなく戦闘の終了となるのだった。